

○水野晶子 古田幸子

目的 高齢者の特徴の一つに関節可動域の低下が挙げられるが、その機能の低下が著しい場合、運動機能面からみると身体障害者と同等となることもあり、高齢者用衣服の設計のためには運動機能面を考慮することが不可欠と考える。そこで、運動機能において共通点があると思われる、身体障害者の衣生活の現状を把握し、問題点を見出すことを目的とした。

方法 日常生活動作の自立度、および運動機能を把握するためのBrunnstrom stageを含む12項目の基礎調査と、衣生活に関する8項目の質問紙を作成し、脳血管疾患により片麻痺の症状を有する男性22名、女性15名を対象に、面接形式で調査を行った。

結果 J I S規格のサイズ範囲表示による体型と着用衣服の比較では、男性の方が実体型よりも大きめの衣服を着用していた。衣服購入時に最重要視する項目としては着脱容易性が50%と最も出現率が高かった。日常着用している衣服の上部の開口部は衿明きで被りが86.5%にのぼった。前明き身頃の留め具の使用テストでは、マジックテープは全員が装着可能であったが、最も扱い易い留め具は直径2cmのボタンと答えた者が最も多かった。上衣の着衣順序と身体の麻痺部位間には1%の有意水準で関連が見られ、着脱時に窮屈に感じる衣服部位は幅径に関する項目が多く見られた。自由回答においても、着脱の困難さを訴える者が多数見受けられ、片麻痺患者にとって着脱容易性のある衣服が必要であることが明白となった。